

東京農業大学 拓友会ニュース

第24号・2008年発行

発行所 東京農業大学拓友会

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1

TEL:03-5477-2404 FAX:03-5477-4032

e-mail: takuyu@nodai.ac.jp

<http://www.nodai.ac.jp/int/original/about/index.html>

第50期総会および懇親会のご案内

詳細は p.18 をご覧ください。

第50期の拓友会総会および懇親会を次のとおり開催致します。

今年度も収穫祭期間中になります。数々の特別イベントも計画されていますので、万障お繰り合わせの上、多数ご出席下さいますようご案内申し上げます。

なお、平成20年の収穫祭は11月1日～11月3日に開催されます。

総会

1. 日時 平成20年11月3日（月）
午前11時より12時まで
2. 場所 2号館3階 国際農業開発学科
共通利用室

懇親会

1. 日時 平成20年11月3日（月）正午より
2. 場所 2号館3階 国際農業開発学科
共通利用室

ネパール国における東京農業大学ラブティ実験指導農場

— 設立の理念とその活動を振り返って —

拓殖7期 前田 昭男

1. はじめに

ネパール国東京農業大学ラブティ実験指導農場（以下ラブティ農場）において40数年前に東京農業大学の先人たちが、自分達の信じた国際農業農村開発協力方法を用いて、日本の国際農業開発協力の先陣を切って鋭意これを実践して行った。その軌跡を辿り、彼等の拠って立った理念とその活動について振り返ってみる。これにより、東京農業大学国際農業開発学科の学生諸君の国際農業開発協力への熱意醸成と開発手法の学習を助長することがこの講演の目的である。

2. 東京農業大学ラブティ実験指導農場設立の経緯と経過

1) 農場設立の発端とその理念

ラブティ農場が設立されるに至った発端は東京農業大学探検部が実施した1962年の第1次、1964年の第2次農業調査に参加した団員が現地の生産・生活など地域農家の現状を知り、その向上に役立つものは何かと議論を重ねた結果による。その結論は「現地農民と直に接し、生活を共にすることによりその現状を的確に把握するとともに、既存協力体制では不十分となっていること、つまり農民自身が問題解決に向けて自ら工夫・努力することへの手助けをす

ること」を実施しようということであった。

栗田先生たちがラブティ農場設置の必要性を痛感する発端ともなった「ネパール国マングン地区農業調査（第2次農業調査）」報告書の結言から先生の言葉を引用し、農場開設の理念と、そして筆者がネパールのラブティ農場に赴くに至った理念の起こるところを以下に記す。

「——（略）一国の農業開発と言えば、——（略）大概の人は大建設、大施設を中心とした大規模な事業を考える。——（略）これは先進国の人々が、とんでもない誤りを犯しているのではなかろうか。或いは異なる筈である両者の時点を同一と錯覚した結果であろうか。——（略）目的地には夫々の国が後進国の幸多かれと作った実に立派な殿堂が輝いてはいる。然しこの殿堂に到るには尚遙かなる道が彼等民衆の前に横たわっているのである。大衆は、農民は自分の足で辿りついてこそ、この殿堂の饗宴を享受し得るのである。この道は、これ等農民にとって決して安易な道ではない。殿堂を作った人々は、その道を辿る民衆の友となり、杖となり、時には励ましの声となって、この殿堂への道を共に歩むことが忘れられてはいはしないだろうか。——（略）唯々必要なのは遙かなる殿堂へ向かって、自分の足で一歩一



農場からマナスルを望む



農場

歩確実に、そして自らの生活を支えながら前進するこれ等地区住民の杖であり、磁石である。而して、民衆、大衆の前進なくしては、輝く殿堂も遂には廃墟となり、真の開発は達成されないであろう。我々は調査し、問題点を発見するだけでなく、更に民衆と共に、その友となって前進することを念願する。——（以下略）。」

ラプティ農場のもう一つの目的は、当時の東京農業大学農業拓殖学科の学生に対する指導理念実践場の提供にあった。その理念を栗田先生の著書「東京農業大学ラプティ実験指導農場要記」より引用して以下に示したい。

「——（略）筆者等のネパール国農業開発に協力する仕方は、ネパール農民の中で、ネパールの農民と共に、その農業技術および生活の進歩向上に努力することであり、それまでの各国の対ネパール農業開発援助協力とネパール農民との間に、大きく口を開けていたギャップを埋める役割であった。それ故に、農民と生活を等しくし、現地大衆の生活の中に埋没して、問題を発見し、現地農民が自分達にも出来ると確信する方法を実施することであった。——（略）誠意ある協力は、現地民衆と生活を共にすることから出発しなければならない。筆者等の協力も、ネパール地方農民の生活と、ほぼ等しい生活することから出発すべきだとした。——（略）だから筆者等は、東京農業大学農業拓殖学科の学生が、かような協力の方法と実際に習熟し得る外地実習農場の設置を痛切に望んでもいたのである」

「そのころの日本は、ようやく東南アジア等の後進地域との交渉が生じて来た時であったが、未だ開発協力に対する積極的な姿勢は確立しておらず、主として経済的な進出が目立ってきた程度であった。日本列島の孤立社会に成長してきた日本民族が、グローバルな活動と、次期文明中に地歩を築くには、他民族、異種文化と、生活の中から接触して理解し合う研修が、絶対的に必要だし、農業拓殖路線を進もうとする青年たちには、不可欠なものと考えていた」。

2) ラプティ農場の運営期間

ネパールは今年（2008年）、240年続いた王制から共和制に移行した。王政復古は1951年、それまでの鎖国から開国へと動き、引き続き山岳活動なども随時解禁されて行った時代にラプティ農場は設立された。ラプティ農場はネパール国ナラヤニ県チトワン郡に設置され、公式には1966年1月1日より運営が開始された。公式開設にいたるには、1964年の東京農業大学第二次農業調査隊による農場の設立準備に始まり、1965年6月のネパール政府による農場設置の許可、7月の農場予定地の決定と長期間を要し、農場の実質的な開墾などの整備は1965年9月から開始されている。東京農業大学による公式的な運営は、ネパール政府が東京農業大学の返還申請を閣議決定受諾した1972年7月25日をもって終了したが要員等は引き続き業務を継続した。農場はラプティモデル農場としてネパール政府の下、1972年11月より1978年まで日本のプロ技支援を得て運営され、1978年ネパール政府園芸局に移管されて、1990年民主化運動激化時に閉鎖されるまで存続した。それまでモデル農場としての活動は続いたものの、先に述べた東京農業大学の理念実践研修の場としては1972年7月にその幕を閉じたと言える。

3) ラプティ農場の位置

ラプティ農場は、行政的にはナラヤニ県チトワン郡の郡庁所在地バハラットプール（Baharatpur）の近く（約2 km）の位置にある。チトワン郡の南側にはインドとの国境をなすシバリーク山脈が東西に走り、北側にはマハバハラータ山脈が続く。チトワンはこの両山脈の間に東西に長い盆地を形成している。シバリーク山脈の北側（つまり盆地の南側）に沿ってラプティ川が西行し、マハバハラータ山脈からはナラヤニ川がバハラットプールの北側に流れ出て西行し盆地の西側で合流する。農業は主にこの両河川の氾濫原上で営まれる。土壌はほとんどが砂質壤土であり、粘土含有量は極めて少ない。

ネパールは気象・地理的には他Terai, Inner Terai,



ビレンドラ皇太子の訪問



農場

Main Himalayan rangeと区分され、これがさらに東部、中央部、西部と細分されている。チトワンは中央部内部タライに属する。タライは熱帯落葉雨林帯気候に属し、干雨期が明瞭に区別される。内部タライもほぼこれに準じた気候であるがタライに比べて標高差、シバリーク山脈があることによっていくらか和らげられた状態になる。雨期は6月初旬～9月下旬、乾季は2つに分けられ、低温乾季が10月初旬～3月上旬、高温乾季が3月中旬～5月上旬である。年平均雨量は2,156mmでその約75%が6月から9月の4ヶ月に集中して降る。

4) ラプティ農場の活動

①ラプティ農場の要員

ラプティ農場設置の許可・取得、農場の土地選定等の準備には島田輝男氏および同夫人が1964年の農業調査に引き続きネパールに駐在してあたった。1965年9月から開墾開始、作付けと運営に着手した。1966年1月1日を公式な農場開設とし、島田輝男氏が農場長に就任した。島田氏（1956年農業経済学科卒、1958年農業経済修士修了、1959～63年インドのガンジーの思想を継承したサルボダヤ・アシュラムの農学校長）はテント生活で開墾を開始した、雨期になってバハトラプールに有志の家屋無償提供を受ける。次いで、探検部員として先の農業調査隊を送り出し、1963年卒業後もネパール赴任を夢見て国内で準備を進めてきた渡辺紘男氏（造園学科1963年卒）

が1966年2月に赴任した。しかし渡辺氏は同年12月17日ナラヤニ川で水泳中に行方不明となった。1967年6月には桜田満雄氏（拓殖7期）が赴任、1968年7月に筆者（前田昭男、拓殖7期、1966～68農大助手）が赴任した。1969年4月桜田氏が任期満了で帰国、ほぼ同時期に桜田氏の後任として清水哲男氏（拓殖8期）、浜田倍男氏（拓殖10期）が要員として赴任した。この間1969年1月から島田輝男氏はコロンボプラン専門家に身分を切替えている。さらに1970年9月1日から前田、清水、浜田3名が日本青年海外協力隊隊員へ身分の切り替えがなされた。1970年12月農業機械隊員の太田修身氏（造園学科1969年卒）が着任、1971年3月土壌隊員の花田俊夫氏が着任した。1972年11月1日には矢沢佐太郎氏（拓殖4期）が着任（1976年まで）、1976年に西村美彦氏が着任。1977年以降は大泉、寺田氏（いずれも拓殖卒）氏等12名の青年海外協力隊隊員が活動した。また研修目的で農場に長期滞在し運営に携わった水口寿男氏（拓殖11期）、坪井伸宏氏（拓殖7期）、藤井一三氏（拓殖10期）等がいる。このほかにSCIボランティア、農場訪問者、短期滞在研究者、国際協力機関・団体等々農大関係者のみに限らず、国籍、人数、来場目的など多岐・多数にわたる支援協力があった。

②ラプティ農場活動の分野

活動内容は多岐にわたり、開墾から始まり、お仕

株式会社 タナカ通商

真珠美の創造

代表取締役 田中博也

真珠と共に50年 何なりと
お気軽にお問合わせ下さい

〒104-0061 東京都中央区銀座8-10-8
銀座8-10ビル8階
TEL 03-3571-3088
FAX 03-3571-3089
E-mail: tanaka77@gray.plala.or.jp
自宅 TEL 03-3322-1994
FAX 03-3322-1291

酒類食品問屋
大星岡村株式会社 横浜支社



代表取締役

岡村 忠雄（専拓7期）

支社長

横浜支社 〒231-0038 横浜市中区山吹町1-7

電話 (045)261-2071(代)

FAX (045)261-4264

湘南営業所 〒253-0071 神奈川県茅ヶ崎市萩園1270-43

電話 (0467)57-0103(代)

FAX (0467)57-0208

本社 〒104-0033 東京都中央区新川1-7-8

電話 (03)3552-3111(代)

FAX (03)3551-7895

インターネット <http://www.oboshi.co.jp/>

着せの技術普及ではないもの、現地受益者のニーズ（問題解決）に応える方法をとった。活動の内容詳細、それを必要とする当時のネパール全体及びチトワン地区などの状況については鈴木俊教授の著書「農業技術移転論」（1997年）に整理されているので参照されたい。活動の概略は次のとおりである。（i）モデル農場運営（作物導入適応試作・試験、作物・栽培技術展示、作物の販売・普及）（ii）DADO（郡農業開発事務所）の活動への協力（普及員の研修、農民の研修、先進農家の耕作指導、農機実演、農機運転管理指導、小農具の貸し出しなど）、（iii）政府農機具工場への協力（サンプル提供、製品評価）、（iv）研修者受け入れ、来訪者受入、SCIキャンプ実施、（v）その他の団体等への協力（USAID, PC, UMNなど）

3. 今に続く農場の理念

拠点農場活動の効果の一つに、農場運営管理のために長年継続雇用してきた現地労務者への技術伝習が挙げられる。彼等は日本人要員と作業も寝食も共にした者たちである。食事は同一のキッチンが調理したものを分けて食べた。昼夜の別なく農場を管理する。大雨になれば夜間でもポンプの引き上げなどに出動する。これによって相互信頼が醸成され、技術も吸収されたといえる。その後故郷の村で農業・農村開発に多大の成果を収めている。労務者頭のKrishna Tamang氏は農場が政府に返還された後は故郷に帰ったが、医師岩村先生（United Mission to Nepal）による住民の医療衛生保健の向上には農業改善が必須であるとの要望により、日本での研修（国際ロータリークラブの支援）派遣に島田氏により推薦された。帰国後は故郷コテン村の農村・農業開発（水路、作物の導入栽培技術改善、学校、道路、簡易上水道、精米・製粉所、電気導入など）を推進し、地域の発展に尽力している。Krishna氏が整備した農場はこれらの地域のモデル農場として多くの見学者を受け入れている。

4. 私の結論

農業農村開発過程の真の担い手はそこで生産をし、

そこで生活を営む草の根の農民・住民たちである（農村は農業生産の場であると同時に農民の生活の場である）。概してこれ等農業農村開発支援を待っている大多数の人々は生産・生活向上手段や方法を自らが確立して行く力を持たない弱い存在であることを忘れてはならない。農業農村開発の推進は農民の農業生産を振興し、農民・住民の生活向上を図ることを目的に、こうした草の根の中で生活し共に学び連帯を強めつつ実現して行くことこそが原点であるとの結論に至った。大規模生産基盤・生活基盤の整備、政府普及制度の改革、生産・生活資機材増強、普及担当者の増員などは手段の一端に過ぎず、ましてや普及の目的ではありえないのである。

ラブティ農場で実践された方法は帰納的思考様式ともいえる方式であり、現地農民から学ぶことが原点にある。実在する問題への対処を根底に置く。横井時敬が説いた「稲のことは稲に聞け」、「農業のことは農民に聞け」と同義であり、東京農業大学建学の精神・理念である観念論を排した実学主義に通ずるものであろう。筆者はこの考えを原点として爾来40年にわたり国際農業・農村開発事業に携わってきた。

5. 学生諸君への提言

学生諸君、大学は学ぶ方法を学ぶところであり、教師・友人等と夢を語らい、今後の進路・活動について大いに議論を戦わせよ。大学で得た友人は生涯の友人となる。各自自分から積極的に友人等と交わり切磋琢磨・自己研鑽に邁進せよ。総ての学生諸君が将来国際農業開発活動につくとは限らないであろう。たとえ国内、国際、或いは農業開発移住等と進路が分かれても、国際農業開発学科の拠って立つ理念の下に、その志や目的意識を共有し、どんな困難にも敢然と立ち向かえる心と身体、「ゴリラのごとく逞しく神の如き叡智を備えて」欲しい。

（この原稿は平成20年7月7日に行われた拓友会講演会の講演をとりまとめたものです。）

住まい作りのトータルプランナー

宅地建物取引業 千葉県知事免許(7)第 6298 号



南房商事株式会社

千葉県茂原市高師 57 番地 電話 0475(23)3251(代表)



地域一番の品揃え

花と緑

契約農家直送だからいつでも新鮮!!

テーブルガーデンセンター

TEL 045-935-4187(代)

〒226-0023 横浜市緑区小山町 611-3

代表取締役社長 篠原 敬一(拓殖20期)

大地に夢を求めて ― 東京農大生ブラジル移住の半世紀 ― 三藤久夫准教授

はじめに

2008年、日本人ブラジル移住100周年を迎えます。ブラジルに移住した日本人はおよそ25万人、現在の日系人口は現在150万人といわれています。最初の移住者は農業労働者（コロノ）が多く、そのため農業分野を通じてブラジル社会に貢献し、今日では医士、弁護士、研究者など知的分野で高い評価を受けています。本学の卒業生も戦後を中心に200名ほどが移住し、農業および関連産業を中心に広い分野で活躍しています。

日本人の農業貢献

日本人移住者が導入・育種・品種改良などに貢献した作物は果樹、野菜、花卉、工芸、雑穀、香辛料から畜産、養魚、養蚕まで多岐にわたっています。

果物の代表的なものとして、甘柿は最初1916年に日本から導入され、今日ではカキ（Caqui）と呼ばれて親しまれています。また、生食用ブドウ、リンゴ、ネクタリンなども日本人によって導入されました。中でも、セラードで開発されたルビー・オクヤマは有名です。その他にクリ、ウメ、アボカド、パイナップルなど数多くの作物を導入・育成しています。

野菜では、白菜、ゴボウ、パレイショ、ナス、ピーマン、トマト、カボチャなど新品種の導入・育成・品種改良に貢献し、生産性や品質の向上に努めました。今日のこの種の統計はありませんが、1960年代にはサンパウロ州で日系人の生産する農産物の割合は、ジャガイモが100%、キュウリ90%、スイカ、カボチャ、エンドウ80%など高い比率を占めていました。

日系人は花卉経営の発展にも大きく貢献しました。とくに、カーネーション、バラの商品化、キクのポット・マムの導入はその典型的なものです。

工芸（繊維）作物ではラミー、ジュート、イグサなどがあります。とくに、輸出用コーヒーを詰める袋に用いられていたジュートは、それまでは輸入されていましたが、日本人が導入し、アマゾン流域の産業にまで成長させました。また、ラミーはパラナ州で栽培、加工が本格的に行なわれています。

穀類では、モチ米、大豆、ソバなどです。とくにモチ米は日本人以外の需要がないため、導入は日本人だといわれています。また、現在ブラジルの主要輸出品となった大豆は日本人移住者の持ち込んだ品種が品種改良に利用されています。

香辛料では、コショウ、紅茶、タバコ、ガラナなどです。トメアスーのコショウは戦前、シンガポールから白井牧之助氏によってアマゾンのアカラ植民



移住

地に持ち込まれ日系移住者の手によって育成されました。近年、病気や価格の低迷で生産量は伸び悩んでいますが、ブラジルの主要農産物としての地位は変わりありません。紅茶もサンパウロ近郊の日系移住者がセイロン、現在のスリランカから持ち帰り、レジストロで栽培を始めました。また、ガラナの栽培も日系人がアマゾン中流のマナウス近郊で始めています。

畜産では養鶏業があげられます。養鶏はサンパウロ近郊のパレイショ栽培日系移住者の副業として始まり、コチア産業組合を中心に普及し、生産が拡大しました。第二次世界大戦中はアメリカ鶏が主流となりましたが、戦後は日本種の導入も図られ、日系人の占める割合が高いのです。

農大卒業生の活躍

本学卒業生は、現在約200名以上がブラジルに移住し、北はベネズエラとの国境から南はウルグアイとの国境までの各地で活動しています。

北では代表的な作物であるコショウをはじめ、オレンジ、野菜、花卉栽培などを中心に農業を営む卒業生が多く、またトメアスーなど各地にある産業組合の理事長、役員などの重要ポストを歴任しています。

また、近年の地球環境保全のための植林活動、アグロフォレストリイへの取り組みも積極的に行なっています。

たとえば、上杉嘉幸氏はベレンの東100kmのイガラッパアスーで、コショウ30ha、デンデヤシ（アブラヤシ）150haを栽培し、さらに300haでゴム・パイア・マンゴーおよびデンデヤシの栽培を予定しています。また伊藤泰介氏はベレンの東250kmのカピトンポッソで、オレンジを中心とした農業経営をしていましたが、果樹園にチークを混植した農場経営

に転換を図っています。

南ではサンパウロ州を中心に、園芸農業はじめ、産業組合や農業資材関連会社の役員や技師など農業関連産業に従事しています。

たとえば、荒木克弥氏はサンパウロから150kmほど離れたアルジャでランを中心とする花卉経営(1.5ha)を営む傍ら、花卉市場の開設、アマゾン地域での花卉栽培なども手がけています。

大島正敬氏はサンパウロ州の北にあるミナスゲライス州でバラを中心とした花卉経営を営み、サンパウロの花卉市場に出荷する他、サンパウロ市内の小売店にも直接出荷しています。南のサンタカタリーナではニンニク、日本ナシの栽培を行なっている卒業生もいます。この他、ブドウ、リンゴ栽培、養鶏など巾広い分野で活動しています。

このような農業発展に貢献した人に贈られる山本喜誉司賞受賞者も3名(花卉導入、農法の確立、緑の保全)います。

この他、農業関係ではありませんが、商業活動で自営をする卒業生も数多く、さらに出身都道府県別に組織された各県人会の会長、文化協会の役員を務める卒業生もいます。

卒業生の社会的活動や相互連絡、また親睦を図る組織としてブラジル東京農大会が組織され、本部となる会館がサンパウロ市内に設置されています。本学卒業生のブラジルでの活動は昭和になってから2〜3名が相互に連絡を取り合って交遊を結ぶようになってきました。昭和になって最初の移住者はパラナ州で麦の改良に従事した佐藤寛一氏で、それに続いて農業技術者、管理職として10名余りが移住しました。戦後、多くは独立自営を目指し、実習生として個人農場で学ぶケースが多くなりました。

現在、会の主な活動は7月末に行なわれる慰霊祭、会報の発行、実習生の受入れ、子弟教育の補助としての寄宿舎運営など、大学との密接な連繋に基づいた活動を行なっています。

課題と展望

ブラジル政府は1970年代後半からそれまで誰も手

を付けていなかったセラード地域の農業開発に日系農協を軸に着手しました。セラードはブラジル中央部に広がる面積約2億haの乾燥台地で、灌木疎林の生える植生です。しかし、日本の協力によって、現在では大豆、コーヒー、トウモロコシなどの大生産地



チーク材の混植果樹園

となり、セントラル・ピポットを用いた灌漑方法で生産性を向上させています。

また、熱帯地域の農業開発で注目されているアグロフォレストリイは坂口隆氏がコショウの栽培に限界を感じて、新たな農業の方向性を探っていたときに、アマゾンの現地住民の屋敷地農業を見て考え出しました。アマゾンの生態系にマッチすることが持続的な農業であると考え、有用植物を組み合わせた森林農業を始めたのです。高位、中位、低位、地這性の植物を組み合わせたもので、今ではアマゾンのみならず、世界各地に広がりつつあります。

しかし、日系農業は明るい見通しが全てではありません。近年、日本への出稼ぎ者は移住者数とほぼ同じで、また高学歴化に伴う後継者不足など、多くの問題点もあります。それらの問題点も含めて、移住100周年を機に再度ブラジルに対する日系人および日系農業のあり方を考えることは重要ですが、つぎの100年に向けた学術、技術交流を含む新たな人的交流を企画し、進めることが必要と考えます。

TA [株] 東京アグリビジネス

TOKYO AGRIBUSINESS CO., LTD.
緑地防除管理・請負メンテナンス・資材販売

代表取締役会長 **大橋 邦雄**
(昭和49年 林学科卒業)

代表取締役社長 **野瀬 忠**
(農業拓殖学科18期)

常務取締役 **高田 久雄**
(農業拓殖学科18期)

〒228-0802 神奈川県相模原市上鶴間2-7

TEL 042(744)6237
FAX 042(744)6295

農学機械・科学機器・生物環境機器・農業資材

有限会社 **オオサカ**

〒352-0033 埼玉県新座市石神1-8-5

TEL 042-474-2402

FAX 042-474-2440

大阪宗太郎 (昭和43年農学科卒業、拓友会特別会員)

大阪 宗仁 (平成9年国際農業開発学科卒業)

東京農大卒業生アマゾン移住50周年記念誌

この記念誌は、1957年、アマゾンのトメアスー植民地に入植した、所謂「農大卒業生軍艦3人組」の50年と彼らに続いた、農大卒業生の40有余年の軌跡を辿った、思いのままの自分史である。評論家大宅壮一が、アマゾンは「緑の地獄」と、杉野忠夫先生は「緑の天国」と名付けたアマゾンに渡った男たち。それぞれの生き様の記録を風化させたくない思いで、この記念誌は作成された。

我々は、「俺だけの肉体と農大で受けた教育」を原資としてアマゾンを生き抜いてきた。何れ我々は、アマゾンの土となる。この拙い記念誌が、何処かに残り続けることを望み、そして、アマゾンで彼岸へ、先立った仲間へ捧げる鎮魂歌でもあることを、汲み取って頂ければ幸いである。

校友会北伯分会記念誌編集委員会（平成20年3月）



アマゾンに住み、生き抜きぬいた証であり
その貢献を印した永久保存版
A4大判サイズ・CD写真集付

謹啓 陽春の候、皆様に於かれましては、ますます
ご盛栄の段、大慶に存じます。

昨年度は、東京農大生のアマゾン移住50周年の年
でありました。現地では盛大な記念会が行われ、こ
の50周年を記念して記念誌、及びCD写真集が、東京
農大校友会ブラジル支部・北伯分会にて製作されま
した。

つきましては、この記念誌の日本国内配送を弊社
にて取り扱う事になりましたので、ご希望の際は、
下記の連絡先に配送先お名前、ご住所及び数量をお

申しつけお願いします。

(株) アルファインテル南米交流

代表取締役 佐藤貞茂（拓15期・74年卒）

料金：¥2,500／冊（送料・税込）

〒460-0016 名古屋市中区丸の内 1-9-21

丸の内IHビル3階

(株) アルファインテル南米交流・名古屋支店

TEL 052-222-8931

FAX 052-222-8930

E-mail: nagoya@alfainter.co.jp

担当：小阪（拓21期・80年卒）

アスレチックトレーナーを目指して

開発47期 山田 大介

2006年に東京農業大学を卒業後渡米し、アメリカ
のワシントン州立大学でアスレチックトレーニング
を学んでいます。農大に在学中は健康科学研究室に
在籍し、榎村教授の下でスポーツや健康に関する勉
強をしていました。

アスレチックトレーニングとは、スポーツ選手の
怪我の予防と対処を学ぶ学問です。アメリカの高校
や大学ではアスレチックトレーナーが働いています。
アスレチックトレーナーは現場でスポーツ選手のケ
アや、医師や理学療法士と選手との橋渡し役の立場
なので、アメリカではかなり重要なポジションとし
て認識されています。選手へのテーピング、クール
ダウン、リハビリ、現場での応急処置、スポーツ器
具や用品のメンテナンスなども求められます。日本
でも少しずつ認識されつつある職業ですが、アメリ
カはスポーツに関する教育プログラムや資格が充実

している為、最近ではアメリカでアスレチックトレ
ーニングを学ぶ為に留学する日本人も増えています。

現在大学では、リハビリ学や解剖学などの専門的
な分野だけでなく、スポーツに関する法律・栄養
学・心理学・社会学
なども学んでいま
す。今後は大学で授
業を受けながら、大
学・高校・病院など
で3年間のインター
ンシップを行います。
大学卒業後米国
公認アスレチック
トレーナーの資格を受
験する予定です。将
来はアメリカで得た
知識や経験を日本に
持ち帰り、日本のス



ポーツ・アスレチックトレーナー向上に関わりたい
と思っています。

1983年 8 月 7 日生

愛知県豊橋市出身

愛知県名古屋石田学園星城高等学校卒

2002年 4 月 東京農業大学 国際食料情報学部
国際農業開発学科 入学

2006年 3 月 同大学卒業

2006年 7 月 渡米

2006年 9 月 Seattle Central Community College
入学

2007年 6 月 Washington State University 編入
アスレチックトレーニング学専攻



国際農業開発学科の動静

2007年度の本学科（高橋久光学科長、志和地弘信主事）の動静は以下の通りである。

2007年 3 月	20日	2006 年度卒業式（卒業者 212 名）
	31日	是永東彦嘱託教授が退職
4 月	1 日	志和地弘信助教授が教授に、中曽根勝重助手が助教に、真田篤史副手が助手に昇格。三簾久夫助教授、杉原たまえ助教授、小塩海平助教授が准教授に着任（職階制度の変更により）。
	6 日	入学式（入学者 165 名：男 106 名、女 59 名）
	11日	前学期授業開始
	14日	学外オリエンテーション（東京農大富士農場にて、上級生 20 名参加）
	12日～18日	農業開発実習（第 1 班、東京農大宮古亜熱帯農場にて、学生 45 名、引率：中曽根勝重助教）
5 月	21日～6 月 3 日	麻疹流行のため世田谷キャンパス全面休講（代替措置として 6 月 16 日以降、土曜日を補講日に指定）
6 月	13日～19日	農業開発実習（第 2 班、東京農大宮古亜熱帯農場にて、学生 48 名、引率：高橋久光教授・夏秋啓子教授）
	9 日	教育懇談会
7 月	21日～22日	地方教育懇談会
	26日～8 月 1 日	前学期定期試験
8 月	2 日～9 月 20 日	夏季休業
	4 日～5 日	キャンパス見学会
9 月	10日～14日	農業総合実習（東京農大厚木総合農場にて）
	19日	編入学試験
	21日～27日	前学期成績相談および追再試験
	28日	後学期事前ガイダンス
10月	1 日	後学期授業開始
	18日～11月11日	後期カレッジ講座「沖縄県宮古島の自然・文化と農業体験」
	4 日～10日	農業開発実習（第 3 班、東京農大宮古亜熱帯農場にて、学生 44 名、引率：小塩海平准教授）
11月	2 日～5 日	収穫祭（5 日は体育祭）

11月	3日	拓友会第48回総会、懇親会
	21日	地域後継者推薦入試、卒業生子弟入試
	22日	推薦入試、社会人入試
	29日～30日	世界学生サミット「新世紀の食と農と環境を考える」開催
12月	2日	併設高校優先入試、運動選手推薦入試、技術練習生優先入試
	26日～1月6日	冬季休業
2008年 1月	7日	後期授業再開
	19日～20日	大学入試センター試験利用入試
	28日～2月1日	後学期定期試験
	31日	卒業論文提出締め切り
2月	2日	優秀卒業論文発表会
	21日～27日	後学期成績相談および追再試験
3月	20日	卒業式
	31日	大田克洋教授が退職

新任教員紹介

岩本 純明（いわもと のりあき）教授

本年4月から国際農業開発学科教授に任ぜられ着任いたしました。農業開発政策研究室に所属しています。

1977年に東京大学大学院（農業経済学専攻）を単位取得退学後、日本学術振興会奨励研究員を経て、1978年から約15年間鹿児島大学農学部勤務しました。大学院時代の研究テーマは近現代日本の農業・農村史で、主として土地制度や農地改革に関する研究を行いました。途上国ニッポンが経済発展をとげていく過程で、農業・農村がどのような役割を果たしたかを考えようとしたものです。鹿児島大学時代は、農業の現場をできるだけ見て歩くように努めました。鹿児島は日本を代表する農業県ですから、沢山のすばらしい農家と出会いました。



農業や農村に対する私の見方の基本は、このときに作られたように思います。全く飲めなかったアルコールを、断らない程度に嗜めるようになったのも、鹿児島時代の「成果」の一つです。

1994年に東京大学農学部から転任してからは農業史講座を担当し、もう一度歴史研究に復帰しました。同時に、アジア諸国に出かける機会も増えました。とくにインドネシアとの縁は深く、ジョクジャカルタ周辺の村に毎年のように通って「定点観測」を続けました。この調査からは多くのことを学び考えられました。途上国時代の日本の経験を、アジア諸国の経験と比較しながら再検討することの重要性を思い知らされたのもその一つです。本開発学科には、途上国での農業開発に貢献したいという意欲を持った学生が沢山います。彼／彼女らには、日本の経験についても、きちんと伝えていきたいと考えています。

4月の赴任早々、1年生のオリエンテーションに同行しました。夜のミーティングでは、新入生の多

 http://www.41858.com/kousei.html 社員・パート募集! 加藤耕房グループ関連法人各社 HPでTK加藤ビル各マンションやニュージラントBMWバイクツーリングの映像をご覧になれます 加藤耕房有限会社 代表取締役(拓殖30期) 加藤 耕 誠 取締役(拓殖31期) 加藤 深 雪 有限会社 テラ・アクア総合研究センター 代表取締役 加藤 深 雪 取締役 加藤 耕 誠 早稲田教育ゼミナール テラ・アクア校/テラ・ガイ校 判子屋鳩ヶ谷店 はんこや耕房安行店 判子屋オンラインショップ 株式会社 ビューティージュエル ネイル・エステ・女性のためのータルサポート CEO 相談役 加藤 耕 誠 医療法人 山崎勇誠会 整形外科・リハビリ・柔道整復 理事 加藤 耕 誠 株式会社 田村工務店 木造・ALC・RC・SRCへ伝統の日本家屋改修工事まで 顧問 加藤 耕 誠 駆け付けの駆けひき自慢の愛車で風になんかせんか? 彩遊MOTO CLUB 世話人 加藤 耕 誠 2輪=BMW R1150RT/R1200C/F650GS 4輪=BMW M3クーペ/MG-TC/Jeepラングラー/ジャガー-XKR他で翔ります 判子屋OLS www.41858.com 総務・CEO室 〒334-0013 埼玉県鳩ヶ谷市南4-17-5 TK加藤ビルフレッজে1F (加藤耕房本社内) Phone. 048(282)8152代 FAX 048(280)3858	資産活用・建築デザイン・設計・監理 不動産売買・仲介・住宅管理・リフォーム http://www.e21038.jp UNI-HEARBEST Inc. 宅地建物取引業許可番号 埼玉県知事(1)第20791号 ユニ・ハーベスト株式会社 一級建築士事務所 一級建築士事務所登録番号 (1)第9686号 代表取締役/デザイナー(拓殖30期) 加藤 耕 誠 経理担当執行役員 (拓殖31期) 加藤 深 雪 都心に寄添う憩いのライフスタイル空間! TK加藤ビルシリーズのリゾート感マンションが話題の南鳩ヶ谷に250世帯 TBS、王様のブランチ「ルームリサーチ」のコーナーで王子が度々紹介してくれています 本 部 〒334-0013 埼玉県鳩ヶ谷市南4-26-1 2F. 9F Phone. 048(288)0848代 FAX 048(288)0868
--	---

くが、開発学科に入学した思いを熱く語ってくれましたが、その真摯な態度に、正直感激しました。学生達が入学時のモチベーションを保ち続けられるように、できる限りサポートしていきたいと思います。室員たちとの毎日の交流も愉しんでいます。こうした良き職場を得られた幸運に感謝しています。これからも、どうぞよろしくお願いいたします。

高根 務（たかね つとむ）教授

本年4月に国際農業開発学科に着任しました。専門はアフリカ地域の農業・農村開発です。農大に着任する前はアジア経済研究所に在籍し、18年あまりアフリカ研究に従事しておりました。アフリカとの関わりは、大学卒業後に青年海外協力隊としてガーナに2年間赴任したことにはじまります。その後アジア経済研究所在籍時代に、ガーナ大学の客員研究員、マラウイ大学の客員研究員としてそれぞれ2年間現地に滞在しました。



私の研究スタイルは、国の政策、地域の歴史、社会構造の特色などを踏まえたうえで、農家の経済活

動の全体像を明らかにしようとする事です。そのためにアフリカ農村の現場で、さまざまなタイプの農家から直接話を聞くことを重視しています。数値データや国レベルの統計資料ももちろん使用しますが、数値からでは読み取りにくい個々の事例の社会的・経済的背景に光をあてることを目指しています。

アフリカの田舎をあちこちまわってみると、意外なことに日本の農村と似た考え方や習慣が多くあるのに気づきます。たとえばガーナで私のようなよそ者が村に入って何か始めようとするとき、シナプスと呼ばれる強い酒を一ビン持参して村長に挨拶に行くのが礼儀です（日本の田舎でも、自治会長さんや氏子総代に挨拶に行くとき一升瓶を持っています）。すると村長はその酒をまず地面にたらし、先祖にささげ、来訪者のことを報告します（日本ではお客さんからももらった酒や手みやげを、まず仏壇や神棚に供えますよね）。またガーナでは地方ごとに川の神や地の神がいて、それぞれ名前が付いています（日本でも山・川・地の神を祀ります）。アブラヤシ畑で取れたての椰子酒を飲ませてもらったときは、最初にとれた酒を先祖と地の神に供するのを見ました（初穂を田の神や神社に供える日本と同じ感覚です）。日本と遠く離れたアフリカの田舎でも、人間のすることはやっぱり似たようなものなんだな、という感慨を何度も抱きました。そしてこの共感が、私の研究の出発点ともなっています。

定年退職を迎え、つづく途中下車の旅

東京農大名誉教授 大田 克洋

新大阪駅を出た新幹線のぞみ号は京都、名古屋を定刻に経由して、次の新横浜駅に停車するため急に速度を落とし始めた。保土ヶ谷区の梅の木あたりにさしかかっているのであろう。車内放送が流れ、それと同時に何人かの人が立ち上がり頭上の荷物に手を伸ばしている。時代は変わったとはいえ、そういう時に見せるある種の緊張と決意のような張り詰めた一瞬の表情は、今の乗客にも変わらない。筆者ももちろん同じ顔をしていたに違いない。



これが何度目の上京の旅になるのか数えたことはなかったが、昭和36年（1961年）の春に農学部農業拓殖学科の第6期生として、茂原分校から世田谷キャンパスに移転したばかりの学科に入学するため、旧国鉄東海道本線の急行に乗って以来、昭和40年3月

の卒業とともに、助手、講師、助教授、教授をそれぞれ10年余り勤め、平成20年3月に定年退職するまで、折々に辿った人生の旅でもあったから、かなりの回数になるだろう。

今でこそほとんど見られなくなった光景ではあるが、筆者の場合も、上京する夜行列車を5人の級友がわざわざ見送りに来てくれていた。そのとき、別便で送った生活用品の荷物の中にはわざと入れなかった「小さな顕微鏡」を、お宝のようにボストンバッグに大事に入れていたのを思い出す。しかし、それが数十年後の顕微鏡収集の第1号になるとは思ってもしなかった。

それ以来の、永い人生の旅路にはテレビドラマのような波瀾万丈はなかったが、母校東京農大に育てられ、護られて、いつも農大と共にあったといえる。昭和43年の初めての東南アジアの旅。後に「熱帯の海のオアシス：マングローブ林」との深い関わりをもつ契機となったメキシコ合衆国グアダハラ大学への日墨政府交換留学生の一員としての留学。近く25周年を迎えることになる本会「東京農大拓友会」の設立。学科名称の変更と学部改組。それに続く大

学院国際農業開発学専攻修士課程の創設。その後の学科の悲願でもあった博士後期課程の設置。そして、すでに数年前のこととなった学科創立50周年記念事業等々との直接・間接の強いつながりの道程であった。

ところで「上京」といっても、関西国際空港の対岸になる故郷のいなか町から、岸和田市にある高校に通い、そこを卒業して直ぐに世田谷の住人になって以来のことであるし、ここ30年近くはずっと横浜に住んでいるのであるから「帰京」といった方が正しいのかも知れない。しかし、気持ち的には、今も「上京」の方が馴染むのである。

それはともかく、今回の上京は、遅くとも6月16日（月）を予定していた。2月に98歳を迎えて、心身共にかくしゃくとしていた母親がここ数日間は手足の浮腫みが激しいというので検査入院をさせるため6月初旬以来帰省していたところ、入院も無事に終わり容態も安定したかに見えたため、一旦上京して17日（火）の名誉教授の称号授与式には何はさておき出席するつもりでいたからである。

しかし、16日早朝の病院からの短い電話連絡は、

その日の上京日程をキャンセルさせ、荣誉ある称号授与式への出席を不可能にしたが、それもわずか数時間に短縮されたとはいえ不安な気持ちを抱えたまま何度も東京・大阪を往復させたくないとの親心だったのかも知れない。母は、5人兄弟の4番目、三男である筆者の、定年退職と15日に迎えた66歳の誕生日を見届けて旅立った。

東海道新幹線のぞみ号は、新横浜駅近くで減速をはじめて間もなく、短いトンネルをいくつか抜ける。最後尾の車両が最後のそれに入った頃、先頭はすでにホームの端にさしかかっている。その数十秒後には音もなく停止した列車から、何事もなかったかのように静かに乗客が降り始める。筆者もその後に続きながら、ふと思い直した。そうだった、この列車の終点は東京駅であった。やっと着いたと思っていた駅は途中駅の一つに過ぎなかった。ある程度の達成感や充実感を感じつつも繰り返してきたこれまでの行程は、結局終着点にはほど遠い途中下車の旅に過ぎなかったのだと。母の逝った年齢まで途中下車の旅を続けるのは容易なことではない。まだ30年以上もあるのだから。

Hawaii 留学雑感

国際農業開発学科 杉原 たまえ准教授

2006年9月から1年間、ハワイ大学のSchool of Social Workにおいて、農村開発で周辺化されている担い手の問題、特に「農村の社会開発と障害」をテーマに研究する機会を頂いた。

2000年に入り、「開発と障害」の問題が、国連や国際機関で取り組まれるようになった。世界人口の10人に1人が障害者といわれ、その大半が途上国に存在する。これらの人口が半世紀以上にわたり深刻化する貧困問題と不可分であるという視座からである。そして、かつてその視座が「Women In Development」から「Gender And Development」に推移していったように、障害を個人の福祉の問題として捉えるのではなく、社会と関わりにおいて捉



山頂から川、河口、海に至る土地利用の単位「Ahupua'a」は、今でも彼らネイティブ・ハワイアンの重要な世界観を形成している。周辺化された人々のエンパワーメントの場として、近年見直されつつある。



株式会社 ムラカミ シード
MURAKAMI SEED CO.,LTD

本 社

〒309-1738 茨城県笠間市大田町341
TEL 0296-77-0354 (代) FAX 0296-77-1295
<http://www.murakami-seed.com>

内原研究農場

〒319-0323 茨城県水戸市鯉淵九ノ割5986
TEL 029-259-6332 (代) FAX 029-259-6226

ガーデンショップ花みどり本店

〒319-0323 茨城県水戸市鯉淵九ノ割5986
TEL 029-259-6332 FAX 029-259-6226

代表取締役会長 村上典男(拓殖23期) 村上 登(拓殖26期) 村上忠義(拓殖29期) 杉森 篤(開発45期)

える視座が、途上国開発支援の現場から提起され始めている。しかし、開発学そのものの中には、周辺化された人々を「開発の担い手（労働主体）」とする先行研究の蓄積が浅い。一方で、障害を「個人の問題」として取り組んできた歴史の長いソーシャルワークの分野では、途上国の貧困問題を扱う「国際福祉学」へと展開し始めている。女性や障害者などの「障害」を、「個人の問題」として捉えず、周辺化された人々の社会化の過程を研究課題とする私が、ソーシャルワークの分野での留学を目的としたのは、以上のような背景がある。よって、社会福祉を個人のレベルで捉える狭義のソーシャルワークに留学の意図があったわけではない。「開発と障害の問題」を、コミュニティデベロップメント（社会開発）と人間開発の両視座をもつ研究を目的としていた。さらに、ハワイ大学では、Hawaiian Studiesや島嶼開発問題、ハンセン病隔離と農村問題、独自の王国がありながら植民地化の歴史を経た沖縄同様の歴史的背景を有する島嶼社会を学ぶことができるということも、ハワイ大学を選択した理由であった。

ハワイというと、観光業によって極端に歪曲されつつ商品化（墮落化）した「ワイキキ」や「パラダイス」などのイメージが強すぎる一方で、Native Hawaiian社会の貧困や社会問題は深刻化している。しかしながら彼等の社会の懷に飛び込むと、独自の「豊かさ」に気付く。開発学の分野で「Social Capital（人間関係資本）」という概念が注目されているが、彼等の人間関係のネットワークの張り巡らし方と物的循環という社会維持システムそのものも実感することができた。

滞在中は、携帯電話も通じない電気も通っていない



Hawaiian Studies の授業でのKalo（タロイモ）の植えつけ準備。Kalo は Native Hawaiian にとって彼らのアイデンティティを維持する重要な植物である。ハワイ大学で遺伝子組み換えタロが開発された時には、Native Hawaiianのデモが起きた。しかし、米軍基地やリゾート開発が、水資源の枯渇や食のグローバリゼーションを引き起こし、Kalo 栽培は危機的状況にある。

いようなNative Hawaiian の世界観を今なお色濃く残す谷（Ahupua'a）や、全米から送り込まれてくるというホームレスが居住している貧困地域、1800年代後半のハンセン病患者の島嶼型隔離の原型となった島などに頻繁に足を運んだ。

学科に我儘をお許しいただく身としてはこの1年は長すぎたが、新たなフィールドを開拓しながらの研究にとっては、あつという間の一年であった。多くの方々に支えられたことを感謝し、得たことを院生や学生に還元したいと思っている。



モロカイ島は、ハンセン病患者の島嶼型隔離の原型といわれる場所である。いまだにこのコロニーへの自由な出入りは法律で許されていないが、幸い元患者がスポンサー（受け入れ）となってくださり、現地での調査をおこなうことができた。また、このコロニー自体も、現存する元患者が他界すれば、30年以内には国立公園として展開していく見込みが高い。

WHOは、ハンセン病については、薬剤が開発された現在、もはや根絶された感染症として扱っており、開発援助の重要課題としての取り扱いは終わっている。しかし、いまだに途上国では新患者が年間4万人以上おり、根強く残る差別が彼らの存在を周辺化させており、社会問題として解決されてはいない。



拓友会賞

「ダイジョ (*Dioscorea alata* L.) の 組織培養における褐変防止がカルス形成および 植物体再分化率に及ぼす影響」

熱帯作物学研究室 平野 久美
指導教員 豊原 秀和
協力者 駒嶺 穆

ダイジョは、単子葉植物ヤマノイモ科 (*Dioscoreaceae*)、ヤマノイモ属 (*Dioscorea*) の食用種として、熱帯アジア地域の根栽農耕文化の基幹作物である。熱帯作物学研究室では、世界各地からヤマノイモの種・品種を収集し、それぞれの種・品種にあった栽培技術の開発や機能性成分の分析などを組織的に行っている。一方、ヤマノイモは種子繁殖が困難なため、増殖は塊茎を分割して種イモとするのが一般的である。しかし、塊茎の分割による増殖は、多くの塊茎を利用するため効率的に決して最良の方法とはいえない。そこで研究室では、ヤマノイモの組織培養による、種苗の大量増殖、育種、遺伝資源の保存を目的として研究を行っている。

平野久美さんはそれらの基礎となる成長点培養、節部切片培養やカルス培養などの技術を修得するため、1年次から研究を行っていた。しかし、ヤマノイモの組織培養は、培養期間中における組織の褐変が激しく、特にカルスからの植物体再分化は褐変が技術確立の妨げとなっていた。そこで、平野さんは卒業論文研究として、ヤマノイモのカルス増殖およびカルスからの植物体再分化時における組織の褐変を抑制する研究を行った。

ダイジョのカルスの褐変要因はさまざま考えられるが、先行研究として行われたグルタチオンやアスコルビン酸、ポリビニルピロリドン等を用いた酸化防止による褐変抑制はあまり効果が得られなかった。そのため、平野さんはダイジョに多く含まれるポリフェノールとポリフェノールオキシダーゼに注目し、

それらの反応過程で発生し、組織の褐変への大きな関与が考えられるエチレンの合成を阻害することで褐変の抑制を試みた。実験は、カルス培養時にエチレンの生成を促進する物質と阻害する物質の両方を培地に添加して行った。その結果、エチレンの生成阻害剤の添加は組織からのカルス形成を阻害し、エチレン生成促進剤の添加は、無添加の場合と比べ、カルス形成に対して同等か品種によっては促進的な効果を見せたことから、ヤマノイモのカルス培養には適度な濃度のエチレンの存在が必要であるとの知見を得ることが出来た。また、カルスの誘導培地に窒素成分が多いと褐変しやすい可能性があるため、硝酸態窒素の含量を減らしたDKN培地を用いてカルス培養を行った。その結果、褐変の抑制効果は見られなかったが、カルスからの発根量が増加し、器官への分化に促進的な効果がある可能性が見いだされた。

以上のように、平野さんの研究はこれまでヤマノイモ組織培養の際に大きな傷害となっていた褐変を抑制し、カルスからの植物体再分化効率を高める可能性を示唆した。本研究の成果はヤマノイモの組織培養、特にカルス培養技術を大きく改善するものである。平野久美さんは、卒業後大学院国際農業開発学専攻に進学し、活躍中である。

この研究は、熱帯作物学研究室教員はもとより、財団法人進化生物学研究所の駒嶺 穆先生による熱心なご指導により実施されたことを付記し、感謝申し上げます。

受賞者の言葉

熱帯作物学研究室 平野 久美

この度は、拓友会賞をいただきましてまことに光栄に思います。私が拓友会賞を頂けるほどこの研究に頑張れたのは、自分の研究を社会に役立てたいという希望を強く持って取り組めたからだと思います。

活性水飼育
日本の豚

やまと豚

代表取締役社長 八日市屋 敏雄 (39経卒)

常務取締役 前田 隼彦 (42拓卒)

執行役員 斉藤 真二 (53経卒)

他、農大卒40名活躍中



安全・安心・おいしさのブランド

株式会社フリーデン

<http://www.frieden.jp/>

本社 〒259-1201 神奈川県平塚市南金目227

TEL.0463-58-0123/FAX.0463-58-6314

生産部門 / (群馬県) 梨木農場、タカナラ農場、吾妻・大平牧場
(岩手県) 大東農場、一関種豚センター、南山形牧場、いわい種豚場
(福島県) 都路牧場・東和牧場 (秋田県) 森吉牧場

流通部門 / 営業統括部、伊勢原工場、平塚工場 (神奈川県)
北関東事業部 (群馬県) 東海事業部 (愛知県)

外食部門 / 豚肉創作料理 レストラン「やまと」
<銀座二丁目本店、銀座八丁目店、横浜ランドマーク店、南青山店>
関連会社 / (株) ダイワフーズ (東京都)、(株) ハム工房都路 (福島県)
(株) フリーデンファーム

私は今年の春に大学を卒業し、さらに農学の知識を深めたいと考え、東京農業大学の大学院へ進学しました。そして連携大学院となっている独立行政法人農業生物資源研究所 ジーンバンクにて、「ケツルアズキの多器官大型化突然変異体の遺伝解析」の研究を行っています。現在、私が取り組んでいる研究は、学部生の頃に行ってきた培養の研究とは異なり、新たに遺伝育種学の知識が必要です。その為、新しい知識や技術を自分のものにするため勉強の毎日です。

研究は、学部生の頃も今も、なかなかスムーズに進まず、失敗すること多いですが、最近、研究の成果とはそう簡単に得られるものではなく、日々の努力の積み重ねの結果であると考えようになりました。今は、研究に対して前向きに取り組んでいます。今後も研究活動を通して育種に関する多くの知識を学び、将来は野菜や花などの新品種を育成するリーダーとして活躍したいと考えています。

東南アジア産ウリ科植物に発生するウイルス病の診断

熱帯作物保護学研究室 水谷 任佑
指導教員 夏秋 啓子

キュウリ、メロン、スイカなど様々なウリ科作物に発生するウイルス病とその病原ウイルスについては、生産上の阻害要因としてのみならず、種子の輸出入など検疫上も注目されている。また、途上国で利用されるいわゆる雑瓜類については、ウイルス病の研究はほとんど行われていないのが現状である。

本研究では、東南アジア各国で採集したウイルス病様のウリ科植物について、病原ウイルスの検出と診断を行い、ウリ科作物に発生するウイルスの発生生態を明らかにすることを目的とした。そのため、インドネシア、ベトナム、ミャンマーから計63検体のウイルス病様のウリ科作物および雑草を採集し、複数の手法で検出と診断を行なうとともに、一部の試料については、接種試験や電子顕微鏡観察などを行った。その結果、2007年3月にミャンマーで採集された斑紋症状を呈していたユウガオからは新種と見られるウイルスを検出している。

このように本論文は、多数の検体の病害診断を各種の植物病理学的あるいは分子生物学的技術を組み合わせ実施し、その発生生態の理解を深めるとともに、新種と考えられるウイルスを発見するという植物病理学上、意義ある結果を提示するものとなった。そこには労を厭わずに実験に取り組み継続するという水谷君の誠実な姿勢、農民に役に立つ研究へと発展させたいという熱意が反映している。また、この成果は、1年次から研究室に所属して室長を務

めた水谷君の積極的な研究室活動、留学生や後輩に対する実験指導などにも見られる親切で誠実な人柄、さらに、ウイルス病だけにとどまらず途上国の農業について理解を深めたという希望で実施したインドネシアでの現地調査などが結実したもので、拓友会賞に相応しいと判断された。なお、水谷君はこの研究を継続するために本学大学院へ進学し、また、さらにインドネシアに赴いての調査を実施している。

受賞者の言葉

熱帯作物保護学研究室 水谷 任佑

大学院国際農業開発学専攻の博士前期課程に進学し、早や3ヶ月が経ちました。私は今、夏休みを目前にして、8月初旬に行くインドネシアジョグジャカルタでの調査採集の準備や、卒業論文研究で発見することのできたミャンマー産ユウガオからの新種と考えられるウイルスについての学会発表の準備など、なかなか充実した日々を送っています。

さて、卒業論文が拓友会賞を受賞できたことは、この上なく喜ばしく思っています。私は、1年生から熱帯作物保護学研究室に所属し、ほぼ研究室ひと筋という感じで、大学生活を送ってきました。1年生の時当時大学院博士後期課程の3年生で、メロンのウイルス病抵抗性品種について研究されていた、インドネシア人のブディダルヨノ博士について、実験技術のみならず、インドネシアの文化など様々なことを教わりました。ブディ博士から一部の研究を引き継ぐ形で2年生からテーマを持って実験を始めました。1人で実験を始めた当初は、ウイルスの実験では基本となる、接種試験もなかなかうまくできず、少しばかり苦労しました。2年生の後半から3年生にかけて、研究室の室長をやらせていただきました。私はあまりリーダーシップをとるのが得意でないので、周囲の人々に大分迷惑をかけつつ、不慣れなオープンキャンパスでの研究室説明担当や、収穫祭での研究室の文化学術展の展示制作などに取り組み1年間の任期を務め切りました。3年の夏休みには、約1週間、夏秋教授のインドネシアジャワ島とバリ島でのウイルス病の発生調査に同行させていただきました。残念ながらそのときに採集したサンプルには新ウイルスなどはありませんでしたが、実際にインドネシアの農業の様子や、圃場で病気が発生している様子を生で見ることができ、またインドネシアの市場でウリ科作物が売られているところも見学できるなど、大変貴重な経験をさせていただきました。4年生も後半になったころ、ミャンマーから採集されたサンプルについて実験を進めていたところ、ウイルス粒子の電子顕微鏡観察で新種と思われ

るウイルスを発見することができました。見つかった時期が遅く、卒業論文研究では、途中経過を載せる形となってしまいましたが、博士後期課程に在学中のキムオッキョンさんとの共同研究として学会発表や、学術誌への投稿、修士論文で完全な結果を披

露する予定です。

今後は、大学、大学院で学んだことを生かして農業に関わる仕事をしたいと考えており、就職活動、修士論文研究ともに頑張っていきたいと考えています。

「箱根駅伝を目指したからこそ学べたこと」

今現在、充実感でいっぱいである。やりきった、というのが正しいだろうか。友達も、家族も、自分自身でさえ本当に箱根駅伝を走れるとは思っていなかった。ましてや主将として迎えるとは誰一人として想像していなかっただろう。箱根駅伝を見た多くの人に言われた「楽しそうだった。笑っているように見えた。」と、もちろん笑っていないし、私自身真剣に走ってはいたが、箱根駅伝を走っているという喜びが内から溢れ出ていたのかもしれない。順位は関係なく私はあの舞台に立てて幸せだった。

私は一般学生が楽しそうに見えて在学中に何度も部を辞めたいと思ったことも、ただただ毎日が辛く辞めたいと思うこともあった。その気持ちは4年の頃が最も強かった。何より「主将」と言う肩書きが私を苦しめていたからだと思う。主将の私に何か直接言ってくれる人は誰もいなかった。私にとって言われない事が何より苦しかったのである。正直箱根駅伝前でさえ辞めたいと思っていた。そんなとき仲のいい友だちが励ましのメールをくれた「子どもの頃に見た夢を本当に実現する事が出来るなんて羨ましい。お前の夢はお前だけの夢じゃなくてみんなの

夢だから最後まで頑張れ」。

直接言われた厳しくもあり、温かい言葉だった。私にとって大学生活は楽しいものではなかったが大変だったからこそ、人の持つ温かみを知り、人は1人で生きていけないという事の本当の意味で学ぶ貴重な時間になったと思う。

東京農業大学 国際食料情報学部 国際農業開発学科
農友会 陸上競技部
主将 濱崎 武雅 (2008年3月卒業)



16年ぶりの全日本大学駅伝出場決定と来年正月の箱根駅伝出場に向けて

16年ぶりに全日本大学駅伝（熱田神宮→伊勢神宮 8区間106.8km）への出場が決まり、本当に感激しました。自分自身は、選手として主将として、さらに4年生としても納得の出来る走りが出来ずチームの足を引っ張るかたちになったことは残念でしたが、チームがそれ以上に頑張ってくれ、みんなに感謝の気持ちでいっぱいです。さらに、これは長距離チームだけでなく短距離や女子チームも応援してもらい、陸上競技部全体が一つになった結果だと思います。みんなで勝ち取った切符なので喜びも数倍でした。

今回、全日本大学駅伝予選会に出場した選手は全体で8名ですが、そのうち国際農業開発学科所属の学生が自分も含め6名ということに驚きました。やはりこれは普段から本学科を卒業された先輩方や先生方の絶大なる応援のおかげであると感じています。

今年1月の箱根駅伝が終わり、新体制になってから私は目標を作りました。春に行われる関東インタ

ーカレッジ大会で長距離全種目に入賞者を出すこと、全日本大学駅伝予選会を突破すること、箱根予選会を上位で通過すること、さらに来年正月の箱根駅伝でシードをとることです。まだまだ、強化しないところもあります。反省するところもたくさんあります。他の大学も強いですが、農大は今のところ良い流れでチームが一つにまとまっています。やはり自分たちが一番に目指している大会の場所は箱根駅伝であり、応援してくれる人たちもまた箱根駅伝を走っている農大を一番見たいはずです。10月に行われる箱根駅伝予選会では上位で通過するために、皆すでに気持ちを切り替えています。夏の合宿や日々の練習で強化し、これからも頑張りますので応援をよろしくお願いします。

国際農業開発学科 4年
陸上競技部 主将 倉持 貴充

2007年度スポーツ大会・体育祭

スポタイを知っていますか？

5月半ばから3週間かけて行う各学科対抗のスポーツ大会です。種目もたくさんあってみんな活躍し白熱します（ちなみにライバルは栄養学科）。これには1年生の若々しい力とチームワークが大事な鍵となります。我が開発学科は一昨年優勝、昨年優勝で2連覇を達成しました。そして今年は……。

スポタイ初日、私は楽しみとプレッシャーで胸がいっぱいでした。そんな折もあり、麻疹の流行のため全キャンパスが休講になり、スポタイどころではなくなってしまいました。他学科の士気が下がり「今年度のスポーツ大会は中止に」という話が出る中、我が開発1年生はやる気に溢れていました。バスケットやバレーについては1か月前から朝練を重ねてきました。「試合はいつになりそうですか？」と試合を楽しみにしてくれている選手を見ている私としては、どうしても開催してほしかったのです。

結局、スポタイは延期され、開催されたのは3週間後でした。大会期間を2週間に短縮したので、勝ち進むほど、試合のスケジュールはハードになっていきます。参加種目をかけもちしている選手は会場に走って移動し、その後ろを応援隊がゾロゾロ…という光景がかなり見られました（笑）。

朝練と試合の日々が過ぎ、大会も終盤となりました。大会最終日の前日、今大会最大のドラマが待っていたのです。

この日はインディアカ男女の決勝戦。まず男子は準決勝で惜しくも負けて4位。次の女子決勝の相手はやはりライバルの栄養学科でした。総合優勝もなかったこの試合、絶対に負けられない!! 我がチームの選手たちは、バイトを休んだり、研究室から抜け出して駆けつけてくれて、試合開始直前にメンバーがそろいました。

まず1セット目は取られた。2セット目、取った！流れが変わった！ 運命の3セット目、横並びの点数がつづく。怖くて見ていられない。「開発優勝するぞ〜！」。円陣で選手も応援もひとつになった。

一気にマッチポイントに持ち込んで優勝！ 朝練で培ったチームワークがここぞというときに発揮されたような試合でした。

接戦を繰り広げたバスケ、チームワークが光ったバレー、アベック優勝のバドミントン、ハラハラドキドキのドッジボール、誰もが息を呑んだインディアカ、ミラクル起こしたゲートボール、実力発揮フットサル、仮装しても強かったフリースロー、みんなで楽しんだ10人縄跳び。

結果、優勝することができました！ みんな最高の試合でした。

今回のモットーは「楽しく！優勝！」でしたが、正直なところ、「楽しく」は通り越して、「勝ち」に行くため真剣になりすぎたかもしれません。私自身、授業中も寝るときもずっと試合のことが心配で、どうしようもない2週間でした。

でも大会がこうして無事に終わったのは、選手、先生方、応援してくれたみんなのおかげです。特に本部の仲間には、朝練や試合準備、応援など精神的にも助けられました。一人では無理なことも、みんなでやれば楽しく、支えにもなりました。ありがとう。

スポタイは同期同士の交流の場であり、また先輩・後輩の枠を越えた学科の団結力を強める機会でもあります。来年も一人でも多くの開発生にスポタイを楽しんでほしいと思います。

スポーツ大会委員長 浅香 美幸

昨年度の体育祭は開発学科始まって以来の総合優勝という成績を残し、さらに前期のスポーツ大会の三連覇も重なり、私はかなりのプレッシャーを感じていたものの、内心では本部生活最後の行事となる体育祭を多くの人たちと楽しめたらいいという気持ちでいました。しかし、他学科からの「打倒開発」の声を聞き、負けたくないという気持ちが少しずつわいてきました。

体育祭の得点を大きく左右するのは、競技はもち

東京都知事登録旅行業第3-5792号



キックス・エアー・チケット

株式会社 **キ ッ ク ス**

代表取締役 **塩 満 仁**

〒187-0003
東京都小平市花小金井南町2-17-2-603
Tel 042-458-1180 Fax 042-458-1180
携帯 090-1761-0970
E-mail: info@kixairticket.com

<http://www.kixairticket.com>



食 の 検 定

<http://www.syokuken.jp>

「国際農業開発学科」の先生方に支えられて運営しています。
食の検定協会

ろんのこと、夏休みから準備を始める櫓装飾や応援合戦の得点です。なかでも櫓はグラウンドに設置され、一般の人たちにも目につく大事な作品です。今年はその櫓のデザインに、毎年みこしのモチーフとなっている開発学科伝統の「ゴリラ」を使うことしました。「ゴリラの毛並みをよりリアルに表すにはどうするか」など、時にはケンカもしながら最終的にはみんなの指を使い、ペンキだらけになりながら鮮やかなピンク色のゴリラを作り上げました。

このように着々と準備が進んでいく中で、ひとつ心配なことがありました。それは、体育祭当日の天気です。天気予報ではずっと曇りや雨の予報が出ていて、延期や中止の可能性もありました。しかしそんな心配をよそに暑いぐらいの快晴となり、いよいよ競技が始まりました。リレーやその他の競技は1位こそ取れなかったものの、多くの競技で2位や3位を取りました。「先生がんばって！」では先生方のご協力もあり圧倒的な速さで1位。綱引きでも開発学科の素晴らしい団結力で1位に輝くことができました。応援合戦では、他の学科がものすごい気合いを見せる中、私たちの学科はみんなで楽しく踊ることをモットーとし毎年恒例の全学科の乱入で盛り上がりを見せました。

こうして体育祭も終わり、いよいよ表彰式が近くと緊張も高まってきました。最初に競技の部の発表で見事に優勝、三連覇を飾りました。総合では惜しくも3位という結果になりましたが、多くの人との繋がりや感動と興奮をくれた体育祭でこのような結果を残せたのも、当日パニックになりそうな私を支えてくれた本部のみんなや先生方、研究室、関連団体のみなさん、参加者のみなさんのおかげです。本当にありがとうございました。

体育祭委員長 青木のぞみ



開発学科 ゴリラの櫓装飾

訪ねてみませんか？ 東京農大「食と農」の博物館

世田谷キャンパスから世田谷通りを渡った馬事公苑前。ここに立つのが東京農大「食と農」の博物館（館長 開発学科夏秋啓子教授）だ。2004年4月の開館以来、「食と農」にかかわる様々な展示や企画が行なわれており、すでに50万人を超える多くの来館者を迎えた人気のスポットとなっている。著名な建築家隈研吾氏の設計による明るく広々とした館内には、酒器を中心とした常設展、農大の歴史や各種の研究紹介などが見られるほか、オホーツクキャンパスからの流水の天使「クリオネ」の泳ぐ姿を一年中観察できるという都内でも珍しい博物館でもある。隣接する「バイオリウム（財団法人進化生物学研究所）」では、キツネザルの一種で親子の様子が可愛いワオレムール、シャンブーの木と呼ばれるウンカリーナなどマダガスカル産の珍しい動植物に囲まれる。

5月17日からは企画「水利用から見たアフリカ乾燥地開発～モロッコ タフィラレット地方のハッターラを用いた水利用～」が、さらに、6月からはブラジル移住100周年を記念して「大地に夢を求めて～東京農大生ブラジル移住の半世紀～」展も加わった。夏休みには、小学生イベント「水時計を作ろう」なども行なわれて、いろいろな世代の来館者で賑わっている。そして、秋からは「レムール～マダガスカルの不思議な猿たち～」展や「地球になった庭～“みどり”の環境づくり千変万様～」展、そのほか各

種のイベントも行なわれる予定である。

世田谷キャンパスにお越しの際には、博物館にもぜひお立ち寄りいただくとともに、館内のカフェ「プチ ラディッシュ」で一息入れて頂きたい。また、「食と農」の博物館にふさわしい企画や展示のご提案や、館内に設置された商品紹介スペースであるコマースボックスの利用（校友専用、年間10万円）なども歓迎しているという。詳しくは「食と農」の博物館ホームページ

(<http://www.nodai.ac.jp/syokutonou/index.html>) をご覧頂きたい。



ワオレムールの親子

第50期総会および懇親会のご案内

第50期の拓友会総会および懇親会を次のとおり開催致します。

50周年記念奨学金への募金のお願い

記

総会

1. 日時 平成20年11月3日(月)
午前11時より12時まで
2. 場所 2号館3階 国際農業開発学科
共通利用室
3. 次第 (1) 一般経過報告
(2) 議事
 - ① 第49期事業報告
 - ② 第49期決算報告
 - ③ 役員改選
 - ④ 第50期事業計画案
 - ⑤ 第50期予算案
 - ⑥ その他

国際食料情報学部国際農業開発学科の50周年記念事業によせられた寄付金をもとに50周年記念奨学金が創設されました。この奨学制度は経済的な理由等で就学が困難になった在学生に対して経済的な支援を行うものです。この制度は平成19年度より施行されていますが、基金が50周年記念事業寄付金から事業費を支払った残金をもとにしているため、まだ脆弱であるのが現状です。50周年記念事業にあたり寄付のお願いを差し上げて、再度お願いを差し上げるのは甚だ失礼とは存じますが、日頃より本学科の発展に力強いご支援と深いご理解を頂いております卒業生の皆様ならびに関係各位に、ご厚意、ご協力を賜りたく、募金をお願い申し上げる次第です。

懇親会

1. 日時 平成20年11月3日(月) 正午より
2. 場所 2号館3階 国際農業開発学科
共通利用室
3. 会費 4千円
(配偶者、子供の同伴歓迎致します。
配偶者および子供は、一人につき
2千円)

国際農業開発学科学科長 高橋 久光

募金に関するお問い合わせ

国際農業開発学科 主事 中曽根 勝重

Tel 03-5477-2408

Fax 03-5477-2419

E-mail katsu10@nodai.ac.jp

出欠通知

総会および懇親会への出欠は10月24日までに、出欠通知を郵送されるか、次にご連絡ください。

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1

東京農業大学国際農業開発学科 志和地 弘信

Fax 03-5477-4032

E-mail hlshiwac@nodai.ac.jp

なお、懇親会へのみの参加もお気軽にお申し込み下さい。

「拓友会ニュース」広告募集中

「拓友会ニュース」では、ニュースに掲載する広告を募集しています。
広告のサイズと料金は以下のようになっています。

1. 名刺サイズ 2万円
2. 名刺2枚サイズ(中入り) 3万円
3. 名刺2枚サイズ(裏表紙) 5万円

広告の掲載を希望される方は、下記へご一報いただければ幸いです。

TEL: 03-5477-2420 FAX: 03-5477-4032

E-mail: k-ita@nodai.ac.jp

国際農業開発学科 板垣 啓四郎

東京農業大学
国際農業開発学科
Department of International Agricultural Development

国際農業開発学科を目指す皆さんのページ
情熱ひろば
東京農大コミュニティ
BLOG随時更新中!

国際協力できる人

NEWS&TOPICS
EVENTS

2007年から国際農業開発学科を志望する中高生向けに学科を分かりやすく紹介するホームページ (<http://www.nodai.ac.jp/int/develop/index.html>) を公開しました。海外実習や国内(学内・学外)実習、教員・学生の調査の様子、研究の様子について学部生・院生・教員からの投稿記事を随時掲載中。(<http://nodai.cc-town.net/modules/nmblog/categories.php>)。

国際協力を志すご子弟や教え子の進学先を考えていらっしゃる方、是非一度アクセスを。

第48期 一般会計収支決算

一般会計		(平成18年10月1日～19年9月30日)		
	予 算 額	決 算 額	差	異
収入の部				
1. 会費	2,200,000	1,720,000	▲ 480,000	
2. 事業	400,000	342,500	▲ 57,500	
ニュース広告	250,000	250,000	0	
行事等収入	150,000	92,500	▲ 57,500	
3. 寄付等雑収入	30,000	11,543	▲ 18,457	
4. 前年度繰越	0	0	0	
合計	2,630,000	2,074,043	▲ 537,500	
支出の部				
1. 事業支出	1,290,000	1,171,500	▲ 118,500	
総会費	150,000	150,000	0	
新入会員歓迎会費	200,000	200,000	0	
名簿整備	150,000	150,000	0	
ニュース発行	475,000	356,500	▲ 118,500	
拓友会賞	40,000	40,000	0	
在校生への補助	200,000	200,000	0	
HP管理委運営費	75,000	75,000	0	
50周年事業への助成	0	0	0	
2. 管理費	1,070,000	588,227	▲ 481,773	
会議費	50,000	15,588	▲ 34,412	
印刷費	100,000	5,649	▲ 94,351	
交通費	60,000	17,000	▲ 43,000	
通信費	600,000	420,270	▲ 179,730	
消耗品費	110,000	36,520	▲ 73,480	
雑給費	120,000	80,000	▲ 40,000	
雑費	30,000	13,200	▲ 16,800	
3. 特別会計積立金	200,000	200,000	0	
4. 予備費	70,000	62,099	▲ 7,901	
5. 次年度繰越	0	52,217	52,217	
合計	2,560,000	2,074,043	▲ 548,056	
特別会計				
収入の部		予 算 額	決 算 額	差 異
前年度繰越	1,821,981	1,821,981	0	
一般会計より繰入	200,000	200,000	0	
雑収入	1,000	821	▲ 179	
合計	2,022,981	2,022,802	▲ 179	
支出の部		予 算 額	決 算 額	差 異
次年度繰越	1,022,981	1,022,802	▲ 179	
50周年事業への寄附	1,000,000	1,000,000	0	
合計	2,022,981	2,022,802	▲ 179	

第49期 一般会計収支予算(案)

一般会計		(平成19年10月1日～20年9月30日)		
	前 年 度	本 年 度	差	異
収入の部				
1. 会費	2,200,000	2,000,000	▲ 200,000	
2. 事業	400,000	400,000	0	
ニュース広告	250,000	250,000	0	
行事等収入	150,000	150,000	0	
3. 寄付金等雑収入	30,000	30,000	0	
4. 前年度繰越	0	52,217	52,217	
合計	2,630,000	2,482,217	▲ 147,783	
支出の部				
1. 事業支出	1,290,000	1,265,000	▲ 25,000	
総会費	150,000	150,000	0	
新入会員歓迎会費	200,000	200,000	0	
名簿整備	150,000	150,000	0	
ニュース発行	475,000	450,000	▲ 25,000	
拓友会賞	40,000	40,000	0	
在校生への補助	200,000	200,000	0	
HP管理委運営費	75,000	75,000	0	
2. 管理費	1,070,000	960,000	▲ 110,000	
会議費	50,000	70,000	20,000	
印刷費	100,000	100,000	0	
交通費	60,000	60,000	0	
通信費	600,000	500,000	▲ 100,000	
消耗品費	110,000	100,000	▲ 10,000	
雑給費	120,000	100,000	▲ 20,000	
雑費	30,000	30,000	0	
3. 特別会計積立金	200,000	100,000	▲ 100,000	
4. 予備費	70,000	157,217	87,217	
合計	2,630,000	2,482,217	▲ 147,783	
特別会計				
収入の部		前 年 度	本 年 度	差 異
前年度繰越	1,821,981	1,022,802	▲ 799,179	
一般会計より繰入	200,000	100,000	▲ 100,000	
雑収入	1,000	1,000	0	
合計	2,022,981	1,123,802	▲ 899,179	
支出の部		前 年 度	本 年 度	差 異
次年度繰越	1,022,981	1,123,802	100,821	
50周年事業への寄附	1,000,000	0	▲ 1,000,000	
合計	2,022,981	1,123,802	▲ 899,179	

学生による研究室紹介

—— 地域農業開発研究室 ——

◎【研究テーマ】

開発学科の研究室の中で私たち地域農業開発研究室は、堀内久太郎先生、三篠久夫先生のご指導の下、社会科学の分野で研究しています。風土・自然環境をベースにしながら、経済・政治・歴史・思想・宗教・文化など幅広い角度から“地域の個性”を浮き彫りにす

る、つまり“一つの国や地域に生活する人々の営み”という視点で物事をとらえ、そのことを通してその地域にあった持続的農業・農村社会の在り方を検討する研究室です。

◎【研究地域と対象】

先生方は、ラテンアメリカ及びアジア各地域の農業経営に関する研究のほか、農村の構造、農法に関

する研究も行っています。もちろん国内においてもこのような研究も行っています。

学生たちもそれぞれ「開発」に関わる協力や援助・農業・環境・教育・女性などを生活者の視点に立って研究しています。私たちは単に理論や知識を追うだけではなく、“貧困”とは何か、“豊かさ”とは何かといったような、個人の価値観や私たちの現実生活と結びつけられるような課題から取り組んでいます。

今年度の学生の渡航先は、ブラジル・エクアドル・タイ・ベトナム・オーストラリアなどの国外や、東京都の小笠原、鹿児島県の徳之島など国内でも様々です。

◎【日常生活とイベント】

研究室の活動ですが、週一回の先生方を交えた昼食会とゼミを行っています。ゼミは三年生が中心となり、みんなで決めたテーマ・本について発表したり、意見交換をしたりしています。ゼミでは知識を蓄えるのはもちろんですが、色々な人の意見を聞くことによってお互いに高めあっていくこと、自分の考え方を言葉で表現することで、自分の立場を主張する訓練の場にもなっています。

ゼミの他にも、七夕の時期に自分たちで竹を取ってきて流しそうめん大会を行ったり、先生と親睦を深める新入生歓迎会や納会などがあります。農大最大の行事である収穫祭では30年以上続いたこ焼き屋



を出店しています。このように学業だけではなく、和気藹藹とした部分もある地域研!! 遊ぶときは遊び、学ぶときは学ぶ!! そんなメリハリのある研究室活動・学生生活を送っています。

最後に一つご報告があります。2008年6月20日～8月9日まで、「食と農」の博物館におきまして、地域農業開発研究室企画による、「大地を求めて～東京農大生ブラジル移住の半生期～」という展示を行いました。小野功先生による講演も行いました。企画は大好評のうちに終わりました。

これも皆様のご協力のおかげです。ありがとうございました。

東京農業大学技術開発！ カムカム商品のご案内

カムカムドリンク



果汁12%ドリンク用
1箱(1缶190cc入×30缶)
¥4,800+送料¥500

カムカム果汁100



果汁100%ドレッシングなどに
1箱(1瓶200cc入×6瓶)
¥5,400+送料¥500

世界一のビタミンC含有量

カムカム協会は、これまで貧しさ故にやむをえずコカ栽培をしていた農民に現金収入の代替作物としてカムカムを栽培させることにより麻薬撲滅にむけて取り組んでいます。

ご注文はこちらまで

TEL 03-5477-2250

FAX 03-5477-2251

株式会社 メルカード東京農大
代表取締役社長 豊原 秀和



おいしさは愛。

ハム工房ぐろーはるのハム&ソーセージは、《和豚もちぶた》を100%使用しひとつひとつ手間と時間をかけてつくられます。

ハム工房
ぐろーはる

〒377-0052 群馬県渋川市北橘町上箱田800
TEL 0279-52-3746 FAX 0279-52-3581
フリーダイヤル 0120-44-3746

グローバルピク farms株式会社

代表取締役 赤地 勝美 (昭和39年卒業)
URL <http://www.gpf.co.jp>